Title	オープン・マクロ経済学
Author	大土井, 涼二
Citation	経済学雑誌. 別冊. 109 巻 1 号
Issue Date	2008-04
ISSN	0451-6281
Type	Learning Material
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学経済学会
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

応用科目・オープン・マクロ経済学　（講義資料）

オープン・マクロ経済学

大土井　涼二

1　オープン・マクロ経済学とは？

古くから，国際経済学は国際貿易論と国際金融論という２つの学問に体系的に区分されてきました。両者の違いを簡単に説明すれば，国際貿易論が商品・サービスの国際取引を扱い，それらの国際配分の効率性を評価することを分析の主対象にしている一方で，国際金融論は為替レートの決定メカニズムや対外資産・負債の経済効果等をその分析対象としている，と述べることができます。つまり，国際貿易，国際金融論はそれぞれ経済の実物的，金融的側面に注目して一国の国境を越えた経済活動を考察する分野であるといえます。

近年，交通手段や通信手段の発展により国際貿易の規模は増大し，貿易形態も多様化してきています。また，金融市場が国際的に統合されるのに伴い，国家間での通貨の取引や資金の流出入はかつてないほどに世界経済に影響を与えるようになってきています。これらの現実はどちらも各国のマクロ経済が互いに大きな影響を及ぼしあうようになってきていることを意味しています。では，このような環境の中で，財政政策や金融政策などのマクロ経済政策はどのように運営されるべきでしょうか？　このように，海外との経済関係を明示的に考慮しながら，マクロ経済政策のあり方やマクロ経済の動きについて考察する分野を国際マクロ経済学（International Macroeconomics），もしくはオープン・マクロ経済学（Open-economy Macroeconomics）と呼びます。

2　オープン・マクロ経済学は難しい？

このように，オープン・マクロ経済学には国際貿易や国際金融の知識をある程度前提としたうえで，さらにそれらをマクロ経済学の文脈で論じるという性格があります。したがって，前提となる知識が多く要求される面倒臭い学問だと思われるかもしれません。確かに，国際金融に関して言えば，外国為替市場や証券取引所という普段あまりお世話にならない代物を扱っているので，通貨や資産の取引を具体的にイメージしにくいという側面があります。従って，これらの分野を習得するには，抽象的な理論だけを勉強しても十分には理解できず，ある程度制度的・実務的知識が必要になる場合があります。

しかし，そのような堅苦しい知識などに無縁でも，「国際経済がらみ」の情報は普段我々の耳に入ってきます。例えば，ニュースで「為替の動き」が報道され，それを踏まえキャスターと解説者によって為替レート変動とその日本経済への影響が論じられる，というのはよく見られる光景です。そこで展開されている議論が正しいかどうかは別問題として，こういった報道に耳を傾け，現実の問題に関心をもつことによって少しずつ国際経済がわかるようになり，さらにはマクロ経済の本質的な部分がより見えてくると思います。

3　講義計画・予定

シラバスに掲載している講義計画は次のようになっています。

[講義計画]

Part I　伝統的な国際マクロ経済分析

1. イントロダクション：為替レート，及び国際収支の基礎概念
2. 購買力平価，金利平価
3. 外為市場介入の効果
4. アセットアプローチ
5. 為替レート変動による経常収支の調整
6. マンデル・フレミング・モデル
7. 為替レートのオーバー・シューティング

Part II　経済主体の最適化に基づいた国際マクロ経済分析

8. 家計の異時点間効用最大化行動
9. 企業の利潤最大化行動
10. 部分均衡分析：小国2期間経済モデル
11. 一般均衡分析：2国2期間経済モデル
12. 2期間経済における対外資産残高，経常収支の決定
13. 多期間モデルへの拡張
14. 新古典派成長理論と世界経済における経済成長率の収束
15. 内生的成長理論

Part I では標準的な学部レベルの国際金融論が展開されます。他方，Part II の8－12ではミクロ経済学的基礎付けに基づく“新しいマクロ経済学”のアプローチを使った国際マクロ経済分析を紹介します。近年，マクロ経済学は①時間の概念，②経済主体の最適化行動という二つの要素が導入されることで再構築され，マクロ経済現象をミクロ経済学の考え方とある程度整合的に説明できるようになりました。Part II の前半では時間の概念が入ったモデルとしては最も簡単な「2期間モデル」を使って経常収支の決定や国際資本移動の経済学的意味を講義します。最後の13－15ではこの新しいマクロ経済学の枠組みを少し応用して世界経済において発生している経済成長率の格差等を議論します。

4　参考書リスト

この講義では具体的な教科書は指定しませんが，参考書としてとりあえず以下のものを挙げておきます。講義時にさらに詳しく提示・説明します。

Part I の講義内容を分かりやすく解説したものとして，以下の2つの文献があります。

[1]　髙木信二「入門国際金融（第3版）」日本評論社

[2]　藤原秀夫・小川英治・地主敏樹「国際金融」有斐閣アルマ

いずれも国際金融の専門家が執筆した信頼できる良質のテキストで，理論と現実がバランスよくミックスされています。また，[1]，[2]のどちらにも Part II で講義する予定の2期間モデルの解説があり，その意味でもこの講義を理解するにあたり有用なテキストであるといえます。従って，上記の2冊のうちどちらか1冊は購入しておいた方が良いと思います。

一方，近年のミクロ経済学的基礎付けに基づく新しいマクロ経済学を学部標準レベルで分かり易く解説したテキストとして

[3]　宮尾龍蔵「コア・テキスト　マクロ経済学」新世社

があります。購入する必要はないですが，マクロ経済学に興味がある方は是非一度目を通してください。

最後に，以下の2冊の本はこの講義を受講する上での基礎知識を与えてくれます。

[4]　伊藤元重「国際経済入門」日本経済新聞社

[5]　岩本武和・阿部健三（編）「岩波小事典　国際経済・金融」岩波書店

[4]は学部初級向けのテキストで，非常に平易で読みやすい本です。コラムで様々な現実のト

ビックが書かれているので，そこだけを読んでも現実の問題に関心が持てて良いかもしれません。[5]は国際貿易，国際金融に関する様々な用語を解説している辞典です。理論用語だけでなく，事務用語にも簡潔な解説がなされているので，この講義に限らず，新聞などでみられる国際経済関連の用語で意味が分からないものがあればこの本で調べることで記事が理解しやすくなるでしょう。